



**Data**

監督: 白石和彌

出演: 斎藤工/もも(チャラン・ポ・ランタン)/ベッキー/竹中直人/的場浩司/小松政夫/岡崎体育/矢島健一/堀内正美/首塚琢真

### ■ショートコメント■

◆昭和のバブル全盛期に公開された、阿佐田哲也原作、若かりし真田広之主演の映画『麻雀放浪記』(84年)はめちゃ面白い映画だった。修習生時代から弁護士5年目頃まで、忙しい仕事の合間をぬってよく麻雀をしていた私は、当時、大橋巨泉が司会をしていた「11PM」の麻雀もよく見ていたものだ。

そんな名作が、『孤狼の血』(18年)『シネマ42』33頁)をはじめ、大ヒット作を続けている白石和彌監督の手でリメイク。そう聞くと、そりゃ必見!だが、よく調べてみると、いやいや、本作はリメイクではなさそう。

◆主人公の「坊や哲」を演じるのは今をときめく斎藤工だが、“とある役”でピエール瀧を出演させていたのが運の尽き。なぜなら、ピエール瀧がコカインを使用したとして、麻薬取締法違反(使用)容疑で逮捕されてしまったからだ。そのため、松竹映画『居眠り磐音』は出演場面を撮り直したうえで、予定通り公開することになったが、本作は「作品に罪はない」との理由でそのまま公開に踏み切った。その賛否は人それぞれだが、私は公開に賛成だ。

◆敗戦後の1945(昭和20)年、九蓮宝燈(ちゅうれんぼうとう)を上がった途端に、雷に打たれた坊や哲は、なぜか2020年の東京にタイムスリップ。そんな設定にビックリだが、さらに第3次世界大戦が勃発し、2020年の東京五輪は中止になっていたそうだから、更にビックリ!

同じ「戦後」でも、1945年の「戦後」と、2020年の「戦後」が全く違うことに、坊や哲はビックリだが、同時に私もビックリだ。そして、そんな時代なればこそ

「麻雀五輪」の開催が決定されることになったらしい。2020年には麻雀人口は急激に増大していたが、それはなぜ？もともと、囲碁の世界のみならず、麻雀の世界でも2020年にはAI搭載のアンドロイドであるユキ（ベッキー）にかなう人間はいないそうだから、かなりヤバイ。なるほど、なるほど。そんな、何でもありの本作は、坊や哲のタイムスリップ以降、どんな展開に？

◆75年後の東京にタイムスリップした坊や哲を助けるのが、誰とでもすぐにヤル、地下アイドルのドテ子（もも）。そして、そのドテ子を雇っている怪しげな芸能プロダクションの社長が、竹中直人演じる大恩寺クソ丸だ。そうなってくると、後は何をか言わんや……。その後の、ハチャメチャというか、バカバカしいというか、何でもありの展開は、あなた自信の目でしっかりと。

◆本作のクライマックスは、麻雀五輪のメイン会場での、坊や哲とAIユキ、そして、ミスターK（的場浩司）とヤン（小松政夫）ら4人の真剣勝負。当初、圧倒的強さを見せていたユキが少しおかしくなったのは、ドテ子が撃ち込んだパルス銃のせいだが、ユキがそこから立ち直った後は、もはや負け知らず。そう思ったが、自動積み込み台が故障したため、手積み台での勝負に切り替わると、原作でも大評判だった“元禄積み”や“燕返し”等の人間（雀士）のテクニックが冴えてきたため、坊や哲、ミスターK、ヤンが俄然強くなり、ユキは苦戦に。しかし、さすがAI搭載のアンドロイド。ユキも“積み込み”をマスターすると、後は天保（てんぼう）や国士無双等の連続だ。何じゃ、これは！しかし、さすがに九蓮宝燈（ちゅうれんぼうとう）は？さあ、本作のラストは如何に？それは、私の想定範囲内に……。

2019（平成31）年4月19日記



**Data**

監督・脚本：石井裕也  
 原作：安藤ゆき『町田くんの世界』  
 (集英社マーガレットコミックス刊)

出演：細田佳央太／関水渚／岩田剛典／高畑充希／前田敦子／太賀／池松壮亮／戸田恵梨香／佐藤浩市／北村有起哉／松嶋菜々子

### ■■■ショートコメント■■■

◆本作は『舟を編む』(13年)、『シネマ 30』未掲載) で名を成した石井裕也監督の最新作だが、安藤ゆきの原作マンガ『町田くんの世界』を映画化したものとのことで躊躇していたが、上映時間の都合で鑑賞することに。前田敦子らも登場するので、少しは期待したが……。

◆新人二人を起用し、人気俳優の前田敦子や池松壮亮、更に佐藤浩市らをその周辺に配役。その冒険はOKだが、如何せん、物語全体が所詮マンガ。そこでは、一方で「現代社会は悪意に満ちている」と定義する若者を登場させながら、他方で町田くんのように「僕は人間が好きだ」と叫び、善意の固まりのような行動をとる人間を主人公に設定している。そのため、一見何か高尚なテーマを語っているように思えるが、くり返せば、所詮マンガ。去る4月30日に観た『幸福なラザロ』(17年) のような深みは全くない。

◆途中で退席せず最後まで我慢して鑑賞したが、本作はハッキリ言って時間のムダ!

2019 (平成31) 年6月11日記



**Data**

監督・脚本：黒澤清

出演：前田敦子／加瀬亮／染谷将太  
／柄本時生／アディズ・ラジ  
ヤボフ

---

---

---

---

---

---

---

---

### ■■■ショートコメント■■■

◆黒澤清監督が、『Seventh Code』（14年）（『シネマ 32』未掲載）、『散歩する侵略者』（17年）（『シネマ 40』70頁）に続いて、前田敦子を主演に起用して、ちょっと変わった本作を。前田敦子扮する葉子は、テレビのバラエティ番組のレポーター。冒頭、湖にいる幻の怪魚を捕獲するためのレポートをするシークエンスが登場するが、これを見てもこの手のTV番組のバカバカしさがよくわかる。葉子は「この仕事はクライじゃないです」と言っていたが、さて・・・？

◆私は、NHKのBS1で何度も放映されている『映像の世紀』シリーズが大好き。それに比べると、本作に登場するディレクターの吉岡（染谷将太）や、カメラマンの岩尾（加瀬亮）たちクルーが、わざわざウズベキスタンまで行って作ろうとしているこのバラエティ番組の意義がサッパリわからない。葉子はレポートするだけのスタッフに過ぎないから、その企画にとやかく言う立場ではないが、やはり今ドキの若い女性らしく、「これは自分の本来の仕事ではない」と感じているらしい。

葉子が本来やりたい仕事はミュージカル歌手で、近々そのオーディションがあるらしい。そこでは、「愛の賛歌」を歌うのだが、葉子の言葉によると、レポーターは反射神経だけで適当にこなせても、ミュージカル歌手は心が入らなければ歌えないらしい。そりゃ、そうだろう。しかして、ある日一人で入った大きな劇場で夢か幻のように葉子が見た風景とは・・・？

◆レポーターだって、自ら手持ちカメラを持って撮影しながら“実況中継”すれば楽しいはず。たしかに、大きなバザールの中で葉子がそれをやってみると結構楽しかった。しかし、そこで発見した猫を一人で追いかけていると、いつの間にかクルーとはぐれてしま

ったから大変。しかし、それを気にせずいろいろなところで葉子がカメラを回している  
と・・・。

本作では、昼間のレポートが終わり、ホテルに入った後の葉子の“一人行動”の不用心  
さが目立つ。市内でバスに乗るにしても、買物するにしても、ウズベキスタンという異国  
の地で若い女の子が一人でショートパンツ姿で歩き回るのは、ちょっとヤバイのでは・・・。  
ましてや手持ちカメラでいろいろ撮影していると、スパイと間違えられる可能性もあるの  
では？もし、中国でそんな容疑で捕まったら、日本と連絡できないまま終身刑に・・・？

そんな心配をしていると、案の定・・・。もちろん、本作は映画だから、一人警官に追  
われる葉子の姿を黒澤清監督のスタッフのカメラが追っているわけだが、それにしても本  
作に見る葉子の行動はあまりにも仕事人としての自覚に欠けているのでは・・・。

◆前田敦子は『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマ 32』125頁）でも面白い味を出  
していたが、女優としての才能は相当なもの。ちなみに、今年の秋に公開される中国映画  
『帰れない二人（江湖儿女/Ash Is Purest White）』に主演している女優・趙濤（チャオ・  
タオ）は、「賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督のミュージズ」として『プラットホーム』（00  
年）（『シネマ 34』260頁）、『青の稲妻』（02年）（『シネマ 5』343頁）、『世界』（04年）（『シ  
ネマ 9』174頁）（『シネマ 17』289頁）、『長江哀歌』（06年）（『シネマ 15』187頁）（『シネ  
マ 17』283頁）、『四川のうた』（08年）（『シネマ 22』213頁）（『シネマ 34』264頁）、『罪の  
手ざわり』（13年）（『シネマ 34』269頁）、『山河ノスタルジア』（15年）（『シネマ 38』220  
頁）等にずっと出演している。それを考えると、前田敦子も「黒澤清監督のミュージズ」と  
言えるだろう。そんな前田敦子が本作ラストでは元AKB 48のセンターを張っていた歌  
手としての実力を見せつけてくれるので、それに注目！

◆「愛の賛歌」は岩谷時子の訳文で越路吹雪が歌ったものが有名で、スタンダードナン  
バーになっているが、本作で前田敦子が歌うのは、それとは全く違う解釈で作られた日本  
語の歌詞。私が生涯のベスト1に挙げる映画『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）で  
は、冒頭アルプス山脈の高原の上で、ジュリー・アンドリュース扮する修道女マリアが、「The  
hills are alive with the sound of music」と歌ったが、本作で前田敦子扮する葉子が「愛  
の賛歌」を歌うのはウズベキスタンの高原の上。さあ、そんな異国の地の美しい風景の中、  
葉子はいかに心を解放して自分流の「愛の賛歌」を歌うのだろうか？なるほど、こんなク  
ライマックスにしているから、本作のタイトルは『旅のおわり 世界のはじまり』に！

2019（令和元）年6月25日記



| Data |  |
|------|--|
| 監督:  | 白石和彌   |
| 脚本:  | 加藤正人   |
| 出演:  | 香取慎吾/恒松祐里/西田尚美/吉澤健/音尾琢真/リー・フランキー/三浦誠己/寺十吾/佐久本宝/田中隆三/黒田大輔/鹿野浩明/奥野瑛太/鷹赤兒/不破万作/宮崎吐夢/沖原一生/江井エステファニー/ウダタカキ/野中隆光/岡本智礼/本木幸世 |

## ■ショートコメント■

◆日本アカデミー賞4部門を受賞した『孤狼の血』(18年) (『シネマ42』33頁) をはじめとして、白石和彌監督の近時の活躍は華々しい。『孤狼の血 Part2』の製作が決まる中で、既に『麻雀放浪記2020』(19年) が公開されたが、それに続いて本作が公開。『キネマ旬報』2019年6月下旬号が6頁～25頁にわたって本作の巻頭特集を組んだのは、その期待と注目の表れだ。

本作の舞台は、2011年の3.11東日本大震災の被災地である石巻。現実から逃避し、ギャンブル(競輪)にのめり込む男・郁男を演じるのは、SMAPを解散した後それぞれが自立した道を歩みはじめた香取慎吾だ。また、「風待ち」という聞き慣れないタイトルとされた本作のテーマは“喪失と再生の海へ”だ。そう聞くと、否が応でも期待感が高まったが・・・。

◆東日本大震災を取り上げ、「喪失と再生」をテーマにした作品は多い。白石和彌監督と組んで本作の脚本を書いたのは、廣木隆一監督の『彼女の人生は間違いじゃない』(17年) を私の評価で星5つとさせた脚本家・加藤正人氏 (『シネマ40』272頁)。

同作では、市役所に勤めながら仮設住宅で父親と2人暮らしをしているヒロインみゆきが、毎週末、英会話教室に通うため夜行バスで東京まで行っていると真っ赤な嘘ついて、実は渋谷でデリヘル嬢をしているという設定が秀逸だった。しかし、完全オリジナル脚本の本作では、中盤のハイライトとなる郁夫の妻・毘野亜弓(西田尚美) が何物かに殺害されるという“殺人事件”の扱いがいかにも中途半端だ。ラストの少し前に犯人は明らかにされるものの、死の直前に夫婦ゲンカしていたというだけで、郁男を犯人と疑う(決めつけてしまう?) 石巻警察の刑事のバカさ加減には唾然! また、たしかに郁夫は亜弓の内縁

の夫で、籍を入れていないから、亜弓の葬式の喪主になれないことは仕方ないとしても本作に見るあのお葬式は一体ナニ？さらに、死んだ亜弓が署名して残していた“婚姻届”に亜弓の死亡後郁男が署名するシークエンスを大層に登場させているのを見ると、アレレ…。これを石巻市役所に提出しなかったのは当然だが、その婚姻届と再生の海、そして、タイトルの「風止め」が一体のように扱われるクライマックスを見ていると、更に、こりゃ一体ナニ？ハッキリ言わせてもらえば、本作は明らかに脚本の失敗だ。

◆キネマ旬報の巻頭特集の冒頭は、俳優・香取慎吾のインタビュー。そこでは、“現実から逃避し、ギャンブルにのめり込む男”・郁男についての、彼の思いがタツプリと語られている。また、白石和彌監督と加藤正人氏のインタビューでも、“逃げる男”への思いが熱く語られ、秋本鉄次氏（映画評論家）の作品評では“不器用で不ツキな大男”・郁男について熱く語られている。たしかに、本作を見ていると、郁男のバカさ加減が目につき、やるせなくなってくる。

しかし、それを徹底させればさせるほど、石巻市の人気者だったマドンナの亜弓が夫・村上竜次（音尾琢真）と離婚した後、娘の昆野美波（恒松祐里）を連れてのまま5年間も郁男と仲良く暮していたという設定が、いかにもウソっぽく思えてくる。そもそも、亜弓はなぜ郁男のようなバカな男に惚れてしまったの？さらに本作を見ていると、亜弓の父親で頑固者の漁師・昆野勝美（吉澤健）も、氷屋で働いている小野寺修司（リリー・フランキー）もほとんど郁男に優しいが、そりゃ一体なぜ？さらに、石巻市に戻ったことで、実の父親・竜次がすぐ身近になったはずの娘の美波が、亜弓殺しの容疑までかけられている郁男に一貫して優しいのは一体なぜ？

そんな根本の点で、私は本作の人間模様に納得ができない。「フーテンの寅さん」はどうしようもないダメ人間だが、人情味タツプリだし、とにかく善良な人間だから、いくら失敗しても、出来が悪くても、周りにいつも面倒を見てやろうという人間がいるのがよくわかる。しかし、郁男のような人間はほとんど放り出せばいいだけで、面倒を見てやる必要はないはずだ。しかるに、本作後半からの展開は一体ナニ？そして、ラストの“再生のあり方”は一体ナニ？私には到底納得できないが……。

2019（令和元）年7月11日記

# SHOW MEY シネマールム

★★★

## パラダイス・ネクスト

2019年/日本、台湾映画  
配給：ハーク/100分

2019 (令和元) 年8月9日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督・脚本・音楽：半野喜弘

出演：妻夫木聡/豊川悦司/ニッキー・シエ/カイザー・チュアン/マイケル・ホアン/大鷹明良

### ■ショートコメント■

◆本作のチラシには、「妻夫木聡×豊川悦司」、「南国台湾。男2人、行き先不明の逃避行」、「楽園の果てには、何がある?」の見出しが踊っている。そして、「豪華キャスト&スタッフが集結し、アジア映画界に新境地を拓く必見作!」の見出しで、次のとおり紹介されている。

日本映画界において名実ともにトップクラスの俳優 妻夫木聡と豊川悦司がダブル主演を果たし、全編台湾ロケでの撮影に挑んだ話題作。台湾の気候や風土のなかで醸し出される主演二人の他の映画では見せなかった相性は本作ならではの魅力だ。二人の「運命の女性」であるヒロインを『黒衣の刺客』でも妻夫木聡と共演した台湾の人気女優ニッキー・シエが好演。ロングランヒット映画『目撃者 闇の中の瞳』主演のカイザー・チュアン、台湾を代表するマルチタレントのマイケル・ホアン、『アウトレージ 最終章』の大鷹明良が脇を固める。

監督は、ホウ・シャオシェンやジャ・ジャンクーなど名匠たちの映画音楽で知られる半野喜弘。日本が誇る世界的作曲家・坂本龍一のテーマ曲も加わり、豪華メンバーたちによる珠玉の一作がここに完成した。

◆また、ストーリーは次のとおり紹介されている。

世間から身を隠すように台北で生きる男・島(豊川悦司)の前に、突然お調子者で馴れ馴れしい男・牧野(妻夫木聡)が現れる。牧野は初めて会う島の名前を知っており、島が台湾にやって来るきっかけになった“ある事件”のことを知っていると言う。その牧野が何者かに命を狙われていることを知った島は、追手から逃れるため牧野を連れて台北から花蓮へ向かう。花蓮に辿り着いた二人の前に、シャオエン(ニッキー・シエ)という女性が現れる。この運命の出会いによって、牧野と島の閉ざされた過去が明らかになり、二人の逃避行は楽園を探す旅に変わっていく…

このチラシを読めば、本作は必見! そう思って勇んで映画館に行ったが、館内はガラガラ。10人にも満たないありさまだったから、アレレ・・・?

◆冒頭、台湾の食堂で一人ラーメン(?)を食べている島(豊川悦司)の前に牧野(妻夫木聡)が現れ、二人でラーメンを食べながら話し込む(?) シークエンスが登場する。



そこでは、無口な島とベラベラよく喋るお調子者の牧野の対比が顕著だが、本作はラストまでその対比が続いていく。演技達人な2人がその対照的な役柄に徹しているのは当然だが、こりゃ、ちょっとやり過ぎでは・・・？


◆1年前の「ある事件」をきっかけに、日本から台湾へやってきたヤクザの島。それを迎え入れた地元のボスであるガオ（マイケル・ホアン）。そして、島に続いて台湾にやってきた加藤（大鷹明良）らが物語を形成していく。加藤は島に牧野の写真を見せて、「この男を探して殺せ」と命令。そんな背景の中、本作中盤は島と牧野の奇妙な絡みが続いていくが、無口な男・島 v s お喋り男・牧野の構図がずっと続くので、いい加減うんざり・・・。

◆そう思っていると、舞台はある日、台北から私も行ったことがある東海岸の美しい町、花蓮に移り、花蓮のバーで日本語を話す台湾人女性シャオエン（ニッキー・シェ）が登場してくる。この女はナニ者？それが本作の大きなポイントになるが、シャオエン役を演じるニッキー・シェの魅力が私にはイマイチ。冒頭の出会いで牧野が島に対して吐いた「あのパーティ会場にいた」「俺はあなたの救世主なんだ」との言葉の謎とあいまって、シャオエンが後半のストーリーを牽引していくのだが、そのため、ストーリーの魅力もイマイチ・・・。

◆本作は全編を通じて、台湾の美しい風景と半野喜弘監督の音楽、そしてスタイリッシュな演出がセールスポイントだ。それはそれでわかるのだが、本作の演出をホントにスタイリッシュと言うの？それが私には疑問だ。そのため、せっかく妻夫木聡と豊川悦司という二枚看板を共演させ対峙させても、トータルとしての魅力を引き出せていないのでは・・・？しかして、本作の興行収入は **How much?**

2019（令和元）年8月16日記



|   |
|---|
| <br>Data |
| 監督・脚本・原作：矢口史靖   |
| 出演：三吉彩花／やしる優／chay<br>／三浦貴大／ムロツヨシ／<br>宝田明  |
| .....   |
| .....   |
| .....   |
| .....   |
| .....   |
| .....   |

### ■■ショートコメント■■

◆本作のうたい文句は、「こんなミュージカル、今までになかった！この夏、「新しい」「面白い」「楽しい」の三拍子そろった「コメディ・ミュージカル」が公開！」。たしかに「ミュージカルが苦手な女子が、アクシデントで「音楽が聞こえると、突然歌い踊り出すカラダになっちゃって…」という本作の設定は面白い。

本作のヒロイン鈴木静香役を演じる三吉彩花の魅力はイマイチだが、本作冒頭から登場し、ロードムービーとなる本作の軸となる人物、マーチン上田を演じるのは、何と御年85歳の宝田明。70歳の私ですらもはや足腰のおぼつかなさを自覚しているのに、何ともお元気なこと！

◆ミュージカルっていきなり歌って踊るから変！そんな、誰もが1度はぶつかるギモンを「逆転の発想」でストーリーの基盤に据えた矢口史靖監督の脚本はたしかに面白い。したがって、本作は「ミュージカルは苦手な人」にも納得できるかもしれない。

しかし、ミュージカルは音楽の良さが最大のポイントだが、「夢の中へ」「狙いうち」「年下の男の子」等のかつての名曲は面白くアレンジされているものの、本作のオリジナル楽曲とその振り付けは私にはイマイチ。そのため、斎藤千絵役を演じるやしる優は体重と同じように存在感があるし、元カレの結婚式に乱入した山本洋子 (chay) のキャラも面白いのだが、全体としてはイマイチ・・・。

◆私が中高校生時代に観て感動を受けた二大ミュージカルは『ウエスト・サイド物語』(61年)と『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)だが、両作は楽しいミュージカル仕様ながら、れっきとした社会的主張があった。しかして、本作でも静香は導入部では「一流企

業に就職できた勝ち組OL」という設定だったが、物語が終わる時点では同社から期待される新プロジェクトの一員としての自分に見切りをつけ、一週間のドタバタ劇（ロードムービー）を共にした千絵のスタジオに向かうという大転換を見せる。したがって、本作もある意味での女の転機を描く社会派ミュージカル？そんな見方ができるかもしれないが、いかにも薄っぺらいからやっぱり私にはイマイチ・・・。

2019（令和元）年8月21日記



**Data**

監督・脚本：市井昌秀

出演：草薙剛／MEGUMI／中村  
 倫也／尾野真千子／若葉竜  
 也／甲田まひる／長内映里  
 香／相島一之／斉藤暁／榊  
 原るみ／藤竜也／新井浩文

### ■■■ショートコメント■■■

◆今年も夏の日本には台風が次々とやってきたため、特に九州北部は大変だった。それと同じように、SMAP解散後の草薙剛が主演した『台風家族』でも、父親・鈴木一鉄（藤竜也）の葬儀のためにすっかり朽ち果てた実家に集まってきた鈴木家の4人兄弟には、遺産相続を巡って大型台風が吹き荒れたらしい。しかして、市井昌秀監督がオリジナル脚本で臨んだ『台風家族』とは？

◆チラシによれば、本作のイントロダクションは次のとおりだ。

その夏、鈴木家の4人きょうだいは10年ぶりに実家へ戻ってきた。銀行で2000万円を強盗したまま行方が分からなくなっていた両親の“見せかけ”の葬儀をするために――。けれども本当の“目的”は財産分与を行うためだった!! 映画『台風家族』は、『箱入り息子の恋』(13)の市井昌秀監督が12年間あたたためてきた“両親への想い”をヒントに制作したオリジナル脚本作品。描かれるのは、生まれ育った地元を離れたきょうだいが10年ぶりに帰省し、再会した際に巻き起こる“珍”騒動! ブラックユーモアあふれる物語には〈怒り〉〈愛情〉〈嫉妬〉〈後悔〉〈許し〉……誰もがぎっと共感する感情が紡がれている。

主演は草薙剛、鈴木家の長男・小鉄を演じる。きょうだい役にはMEGUMI、中村倫也。ほか、尾野真千子、甲田まひる、若葉竜也、長内映里香、樹原るみ、そして藤竜也。若手からベテランまで魅力的な俳優が揃った！世界一“クズ”な一家だけれど何故か憎めない、そんな愛すべき鈴木家の“台風”のようなめまぐるしい夏の一日は、果たしてどんな結末を迎えるのか。家族ひとりひとりが抱えるそれぞれの想いを知ったとき、思いがけない大きな“感動”が押し寄せてくる!? 家族って何だろう——家族について考えなくなる、家族を愛おしく思える、これは普遍的な“家族”の物語。

◆また、チラシによれば本作のストーリーは次のとおりだ。

台風が近づく2018年のある夏の日、鈴木小鉄は妻と娘を連れて実家へと車を走らせていた。10年前、銀行強盗で世間を騒がせた両親の葬儀に参列するためだ。葬儀といっても死体はおろか逃走に使われた霊柩車も、強盗した2000万円も未だ見つかっていない。そんななか、音信不通だったきょうだいが集まる理由は、財産分与を行うためでもあった。すっかり朽ち果てた鈴木家に長男の小鉄、長女の麗奈、次男の京介が次々とやって来る。しかし、末っ子の千尋は“見せかけ”の葬儀が終わってもやって来なかった。そして、財産分与の話し合いの最中に見知らぬ訪問者が現れたことで、小鉄をはじめきょうだいそれぞれの本音や不満、秘密が炙り出されていく。やがて明らかになる10年前の真実。なぜ両親は強盗をしなければならなかったのか、なぜ消えてしまったのか……。

◆本作には、「失踪宣言」「死亡の推定」「消滅時効」等々の法律用語が頻繁に飛び出す。鈴木家の概ね2000万円相当と見られる遺産を少しでも多く、あわよくばその独り占めを狙っている長男の小鉄（草薙剛）はそこらあたりをしっかりと勉強してきたらしい。しかし、さまざまなドタバタ劇の中で2000万円を強盗されたことによって、こちらも大きな挫折を味わされた元銀行員がやってきて、銀行は鈴木一鉄に対して裁判を提起し、その勝訴判決が確定しているため、一鉄の相続人らはその債務を承継する義務があることを告げると……。

◆本作では、長男の小鉄に負けじと、新井浩文演じる次男の京介も存在感も見せている。もっとも、その新井浩文は強制性交罪で逮捕、起訴されたため、6月予定だった本作の公

開は9月に延期された。たまたま私が東京地裁の法廷に出廷した9月2日（月）がその新井浩文の第1回公判期日だったため、その日はその話題で盛り上がったが、コトの真偽は別として、俳優もしっかり自分を律しなければ・・・。

◆その点、SMAP解散後、稲垣吾郎は阪本順治監督の『半世界』（19年）で、香取慎吾は白石和彌監督の『凧待ち』（18年）でそれぞれ主演する中、草薙剛も本作で主演し、俳優としての人生を歩き始めたのは立派なもの。もっとも、本作で彼が演じた鈴木家の長男・小鉄のキャラは大阪弁で言えば“セコい男”で、最低の男。しかし、俳優としてはそんな役ほど演じ甲斐があるというものだ。

9月13日から公開される『人間失格 太宰治と3人の女たち』では小栗旬が最低男の作家・太宰治を演じているので、最低男ぶりをそれと対照して比べてみるのも一興かも・・・。

2019（令和元）年9月13日記



**Data**

監督・脚本・編集: 大森立嗣

出演: YOSHI / 菅田将暉 / 太賀 / 奥野瑛太 / 植田紗々 / 豊田エリー / 國村隼 / 角谷藍子 / 門矢勇生 / 荒巻全紀 / ACE / 葵揚 / 水澤紳吾 / 池内万作 / 伊達諒 / 中島朋人 / 大谷麻衣 / 播田美保 / 水上竜士 / 小林千里 / 原沢侑高 / 伊藤佳範 / 大駱駝艦 / 村松卓矢

### ■■ショートコメント■■

◆本作のチラシには、「自由。絶望。青春。焦燥。刹那。希望。」の文字が並び、「タロウ、エージ、スギオ。一瞬を永遠に生きようとする、まだ世界を知らない3人の少年。」の見出しが躍っている。そして、チラシでもホームページでも、次の解説がされている。すなわち、

「さよなら溪谷」「日は好日」の大森立嗣が監督・脚本を手がけ、刹那的に生きる3人の少年の過激な日常を描いた青春ドラマ。主人公タロウ役には、本作が俳優デビューとなるモデルのYOSHIを抜てきし、タロウと行動をともにするエージを菅田将暉、スギオを仲野太賀がそれぞれ演じる。戸籍も持たず、一度も学校に通ったことのない少年タロウには、エージとスギオという高校生の仲間がいる。エージとスギオはそれぞれ悩みを抱えていたが、タロウとつるんでいる時だけはなぜか心を解き放たれるのだった。空虚なほどだっ広い町をあてどなく走り回り、その奔放な日々により自由を感じる3人だったが、偶然にも1丁の拳銃を手に入れたことから、それまで目を背けてきた過酷な現実に向き合うこととなる。

ところが、そんな“青春ドラマ”がR15+に指定されているから、アレレ……。そりゃ一体なぜ？

◆事件でも人間でも、すべてに表と裏があるのは当然。したがって、本作の主人公になる3人の若者をどう見るかについても、大森立嗣監督のように表から見ることは可能だが、私のように裏から見れば……？

本作では、まさにこの3人は思うがままに生き、他者の立場（迷惑）など何も考えていないようだが、それでは困る。そのため人間社会には、法律、刑罰、警察がある。しかし、本作には一切それが登場せず、あくまで3人の若者の視点のみが強調されている。しかし、

それでいいの・・・？

◆若者はエネルギーがあり、行動力に満ちあふれているが、未熟なもの。そのため、『ロミオとジュリエット』(96年)のような悲劇も起こすし、『ウエスト・サイド物語』(61年)のようなバカげたケンカで命を落としてしまうこともある。本作ではスギオ(太賀)の中途半端さが際立っている分だけ、最も若いタロウの無知と狂気が際立っている。しかし、世の中にこんな男を一人前の人権を持った人間として同居させていいの？

ちなみに、タロウは戸籍もなく一度も学校に通ったことがない少年という設定だが、8月11日に観た『存在のない子供たち』(18年)を生んだ国レバノンやアフリカの某国ならともかく、今の日本でそんなことがあり得るの？タロウのような、およそ人間とは思えない凶気(=狂気)の存在が人間社会の中に紛れ込まれたのでは迷惑千万。そうならないために法律があり、警察があるはずだが・・・。

◆本作については、新聞紙評はいろいろとカッコいい評論がされている。しかし、私はそれらを読んでウンザリ。また、本作を観ていると後半からはいちいち反論したくなったし、鑑賞放棄までしたくなった。それほど本作について私は反感ばかりだったが、さて、あなたは・・・？

2019(令和元)年9月18日記





**Data**

監督: 西谷弘  
 原作: 平野啓一郎  
 出演: 福山雅治/石田ゆり子/伊勢谷友介/桜井ユキ/小南晴夏/風吹ジュン/板谷由夏/古家一行

### ■ショートコメント■

◆映画.com の『マチネの終わりに』の解説には次のとおり書かれている。

東京、パリ、ニューヨークを舞台に音楽家とジャーナリストの愛の物語を描いた芥川賞作家・平野啓一郎の同名ベストセラー小説を福山雅治、石田ゆり子主演で映画化。パリでの公演を終えた世界的なクラシックギタリストの蒔野聡史は、パリの通信社に勤務するジャーナリストの小峰洋子と出会う。2人は出会った瞬間から惹かれ合い、心を通わせていくが、洋子には婚約者である新藤の存在があった。そのことを知りながらも、自身の思いを抑えきれない蒔野は洋子へ愛を告げる。しかし、40代の2人をとりまくさまざまな現実を前に、蒔野と洋子の思いはずれ違っていく……。蒔野役を福山、洋子役を石田がそれぞれ演じ、伊勢谷友介、桜井ユキ、小南晴夏、風吹ジュン、板谷由夏、古谷一行らが脇を固める。監督は「容疑者Xの献身」「昼顔」の西谷弘。

◆世界的な演奏家ともなれば、専属のマネージャーがついているのが当然だが、本作のそれは三谷早苗（桜井ユキ）。そして、蒔野聡史（福山雅治）と小峰洋子（石田ゆり子）の出会いには、最初から妙にこの早苗が絡んでくる。

本作中盤、フランスを舞台に聡史が洋子に対して熱い想いを打ち明けたことによって、洋子が熟慮を経て聡史と出会うために東京にやってくるから、さあ、そこが2人の恋の成就点！そう思っていると、早苗が聡史のスマホに仕掛けた“あるトリック”によって、見事2人はずれ違っていくことに……。

◆今ドキ、スマホは命と同じくらい大切だから、タクシーに忘れるなどというへまはあり得ない。しかし、ギター師匠・祖父江誠一（古谷一行）が急に倒れたとの報を受けて、急いでタクシーで駆けつけた聡史は、スマホをタクシーに忘れたばかりに、後は早苗の思

うがままに……。しかし、いくらマネージャーとはいえ修理のために預かった聡史のスマホを、早苗は勝手に覗いていいの？これでは、個人の“通信の秘密”もナニもあったものではないが……。

◆私が最近ハマっている華流TVドラマでは、男たちの権力争いも、後宮の女たちの嫉妬争いも複雑極まりないから、そのドラマティックな展開に手に汗を握ることになる。しかし、本作のストーリーのネタは、前述した早苗のスマホの細工だけだから、単純そのもの。これ（だけ）で2時間のドラマをもたせるのは本来ムリ筋だと私は思うのだが……。美しいギターの音色がその退屈な流れを補ってくれるものの、さて、あなたの満足度は……？

◆それから〇年。それから〇ヶ月。本作はそんな字幕を再三登場させながら、聡史と洋子の“人生”を描いていく。しかし、あの時、あの細工（トリック）によって決定的に別れてしまった2人には、もはや再会はないはず。そう思っていたが、ラストに向けてはまさかのそんな展開も……。そして、何と最後はハッピーエンドに。ええ、そんなのあり……？

2019（令和元）年9月20日記



**Data**

監督・脚本：三谷幸喜  
 出演：中井貴一／ディーン・フジオカ／石田ゆり子／草刈正雄  
 ／佐藤浩市／小池栄子／斉藤由貴／木村佳乃／吉田羊  
 ／山口崇／田中圭／梶原善  
 ／寺島進／藤本隆宏／迫田孝也／ROLLY／後藤淳平（ジャルジャル）／宮澤エマ／濱田龍臣／有働由美子

### ■■■ショートコメント■■■

◆内閣総理大臣・黒田啓介（中井貴一）が演説中に、有権者の1人から投げつけられた石が額に当たり記憶喪失に……。自分が総理だということすら憶えていないというから、大変だ。もっとも、彼の支持率は最低で、憲政史上最悪の総理大臣だったようだから、これを機会に退陣すれば、タイミングも良し。そういう考え方もあり、本人もその気のようにだが、常に総理の側に付き添っている怪しい(?)秘書官・井坂（ディーン・フジオカ）は、断固それを拒否。総理の記憶喪失は、当分の間絶対秘密に！それまで、何としてもこの危機を乗り切るハラを固めたが……。

◆三谷幸喜監督・脚本によるポリティカルコメディは面白そうだから、私の期待は大。しかし、近時の邦画のバカバカしさに失望している私は、なかなか見る気がしなかった。しかし、たまたま時間がうまく合ったため、やっと鑑賞する決心を。しかして、結果は大正解。

『笑の大学』(04年)『シネマ6』249頁)ほどのインパクトはなかったが、中井貴一の真面目な熱演(?)を軸に、謎のフリーライター・古郡祐役の佐藤浩市や、熱い事務秘書官・番場のぞみ役の小池栄子等の達者な演技が相まって、十分楽しめ、かつ少しはホロリとさせられるコメディになっていた。もっとも、「悪徳」が取り柄だった黒田総理が、記憶喪失を契機として善人・一辺倒の総理として再出発するという物語は、あまりに単純。しかも、米国初の日系女性大統領スーザン・セントジェームス・ナリカワ（木村佳乃）が、「そんな総理を大絶賛！」とまでやれば、そりゃ、あまりにノー天気！まあ、映画だからいいようなものだが……。

◆総理のクビは軽いから、いつでも、誰にでも、すげ替えは可能。それが日本の政治。

実力者の官房長官・鶴丸大悟（草刈正雄）は、そう確信しているようだが、確かにそれもあり。しかし、総理が官房長官の脅しの前にオドオドしている姿を現実にはスクリーン上で観るのは、日本国民の1人としてやはりつらいものがある。

しかし、いつ、どのように記憶が回復したのかは知らないが、「しがらみのない政治」を取り戻そうと、真正面から再出発する黒田の姿は、バカバカしいと思いつつそれなりに感動的だ。最初にそれに同調したのは秘書の井坂だけだったが、次第に秘書室長も頑張っていくことに・・・。

◆古郡祐を演じた佐藤浩市の存在感はさすがだが、古郡は黒田のスキャンダルのみならず、政敵・鶴丸のスキャンダルをもすぐにキャッチしていくから、この国のリーダーたちのワキの甘さにビックリ。学校のホームルーム用の内閣ではなく、日本国憲法に基づく内閣なのだから、総理大臣や官房長官等、権力の中核はしっかりしなければ！

総理の浮気が重大なスキャンダルなら、総理夫人と秘書官長との不倫も大きなスキャンダル。それが暴露されたことによって総理に迷惑をかけた秘書官長の辞任は当然だが、さて、本作後半のストーリー展開は・・・？

スキャンダルにはスキャンダルで対抗！こちらが浮気や不倫なら、あの官房長官と黒社会との接点は・・・？そんな暴露合戦ではホントは困るのだが、正直な総理大臣の「ごめんなさい」が国民に対してうまく機能すれば、ひょっとして・・・？田中角栄元総理もしたたかだったが、ホントは正直者だったらしい黒田総理が、ラストになるにつれて見せるしたたかさにはしっかり注目したい。

◆『シネマ43』は、「第2章 ハリウッドの話題作」の中で、「大統領にまつわる映画」として、①『LBJ ケネディの意志を継いだ男』、②『フロントランナー』、③『華氏119』を掲載した。これはいずれも、現実をしっかりと見据えた問題提起作だった。また、『シネマ45』では、「第1章 報道のあり方と民主主義を考える」の中で「9.11テロをどう考える？」として、①『記者たち 衝撃と畏怖の真実』、②『バイス』を、「新聞記者、報道写真家のあり方は？」として、③『新聞記者』、④『プライベートウォー』を掲載した。これらもすべて、現実を見据えたうえでの問題提起作で、大いに考えさせられるものだった。

それに比べて、本作は単なる記憶喪失の総理大臣をテーマ（ネタ）にしたポリティカルコメディだが、あまりにくだらないTVドラマの延長のような原作モノや恋愛モノが氾濫している今の邦画界なら、その価値は十分・・・？

2019（令和元）年9月26日記